

中島川水辺の表情(六)

—あめやの幽霊参観と中島川—

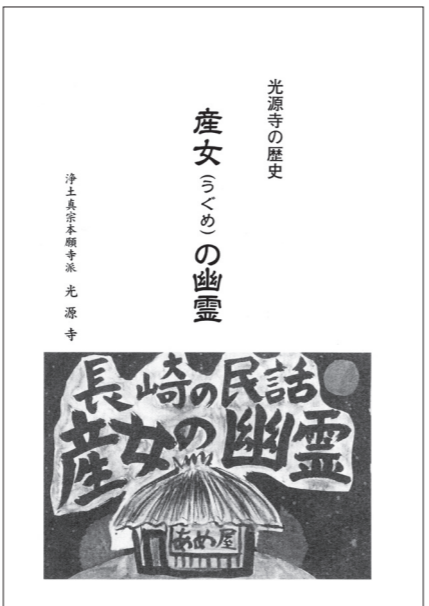
古屋 陸夫

平成二十四年八月十六日、よく晴れ渡り日差しは暑い。蝉声頻りで街路は賑やか、ここは寺町通り。路行く子ども群れも、あつちにつっかり、こつちにつっかり活発である。「君たちどこから来たの?」「西北から」これは方角ではなく小学校名のことである。五十名位の低学年の児童たちを引率の先生が四名、列からはみだす子どもを押しやり、横断歩道では手を広げて交通整理。これは小学校としての引率ではなく、学童保育という集団「こんなにいるの?」児童数のことである。「もつといっぱい百人以上います」と誇らしげに答えられた。

今日、八月十六日は伊良林光源寺の「あめやの幽霊御開帳日。一度は見たいものだ」と足を運ぶ。私は二年前にも見学したので実際には二度目。従つてみやげの幽霊あめをもらうのも二度目、飴につられて行ったのではなく、いや多少はその気もあるか。

周囲を見回すと大人一人できているのは当方位か?もぞもぞとする。子ども同伴の親子連れ、また先生方に連れられた二〇人、二〇人のグループなど賑やかで、ほほえましい。其の昔は幽霊などを見るのは人知れずこつそりと、恐ろしい思いでびくびく・どきどきと挑んだ筈だ。肝試し会などといって、薄暮から場所はやつぱり墓地だった。

現在の光源寺では日中に堂々の幽霊詣で。先ず本堂に上げていただき児童たちの群れにぼつんと二人いわくありげに座る。今から紙芝居が始まるのである。勿論、「あめやの幽霊」についての物語。画面は大きく見やすい絵模様。男の子女の子、親御さんも熱心に観戦。怖い話の中にもひつそりと人の世の救いが滲むよい話。女性の法務員の方が名調子で紙芝居を説法。見てよかつたなという感想が周りの雰囲気。次の案内で別室に移る。室内は薄暗く照明が落としてある。「部屋に入りたくない。」などと、小三位の女の子がひつそりと呟く。これは紙芝居の効果か、親御さんが女の子の背中をそつと押して部屋に向かわせる。親と子のほほえましい一瞬。



長崎民話・産女(うぐめ)の幽霊(長崎・光源寺発行)

次いであめやの幽霊様が現世の飴屋の店主に水を掘り当てさせたという麴屋町のゆうれい井戸について言えば、この辺二帯の地勢をみると、寺町・麴屋町・伊良林町、その上辺は風頭山というよりも丘が連なっている。水源は山が

高ければ高い程水が豊富。だが之の二帯には高い山がなく、水が少ない地勢で慢性的な水不足の地域で町の人々は水不足を何時も体感していたのである。そこで飴屋の店主は、欲しいものの筆頭に水をあげたのだと推測できる。思うに「あめやの幽霊様」は、大昔の出身母体は水の里であり、水の精ではないか。幽霊様が櫛を落としてあめや店主に水源を当てさせたのもたやすいこと、水の精である証しと考える。

光源寺と中島川は直線距離で二二〇mと近い処にある。現今あめや様は、浮き世から引退して、その実体は水の里である中島川のいずこかにお隠れになつている。当方は中島川を渡る毎に何処かなと住み処を穿さくしているが、いまだに発見に至っていない。

あめや様は光源寺と中島川を自由に行き来してはいるのではないか。特に八月十六日の日は大勢やつてくる子どもたちのために、当方もかまえて中島川をつぶさに見てまわっていると、変なことに気付いた。それは青鷺が水の面の奥を、首を傾げて覗いているのだ。頻りに何かを見ている。青鷺は当方よりも、うんと水の精に近い間柄、水の精とのかすかな交信をキャッチしているのではないか、そんな気がして中島川の森羅万象を見ているのである。

この日、「民話・産女(あめや)の幽霊」を光源寺で拝領した。

(平成二十四年八月 九州文学同人)

風信

〇七月と言えば七夕ですが、本来の七夕は旧暦の七月七日であり、現在の七夕では、どうも私には季節感が少し違う。私の子供の時は、長崎では八月七日

部屋は二十畳位で満員、入場者は多い。法衣の男性法務員の方が指揮棒を持つて説明されている。薄暗い部屋そして中央の床の間に、あめやの幽霊様がほんやりとした光の中に首うなだれて、おもわしげなたたずまいで居らつしやる。長い黒髪、白い衣装を身に付けられている。屋内の雰囲気から臨場感十分、周りの人々は黒い影、シーンと会話は無い。畳の間にみんな座っている。勿論子どもが多い。音色は法務員さんの声だけ、いわく「あめや様には手は無い。足もない。被爆されました。」とか、さもありません!生誕は何百年にも及び、御長命である。黒髪が異常に長い、年に三cm伸びるという。三cm?いや三cmではないのか、当方、法務員さんの話に連られて心の内でそう反論している。

「目はガラス玉ですが、年によって片目の光が右側であったり、左側であったりします。昨年は左で今年は右光りです。見る位置も決まっていますこの辺りです」という。座敷中央よりやや右より。当方その位置に立つて、あめや様の目をみる。

法務員さんいわく「どうです、右目が光つていよう。」困った、どうも分からん!私はそんなに目がよい方でもない、目の検査表で〇・七なのである。そう言おうかと思つたが、それもはしたない。法務員さんから「右目光つているでしょう」自信ありげに催促される。周りに居並ぶ黒い影もなんらかの摩訶不思議な現象に期待している。ええい!ままよ!かすかに光つています。」条件付の返答をする。「かすかなのは、今、人が前をさぎぎつたからですよ。もう一度見て下さい」と法務員さんいかに熱心である。

仕方がない「今、はつきり見えました。」と言つた。相手ははつきりと言つたので納得。周りの黒い影の人々の中からも、二、三溜め息が漏れ聞こえてくる。黒髪の三cm説はどうか?当方あめや様の真実を追及するためにきたのではない。来年の課題として残そう、それが夢がある。ネス湖のネッシーと同じ伝である。

がタナバタであった。七夕にはご馳走はなかつたが、八月といえば夏休みで短冊らしき物にお習字をさせられ、姉達は紙で大きな綱を作つて竹に下げていたのを覚えていた。(昭和の初年頃です)

〇この頃になると長崎のイカの浦から「人形薯」を持つてきて載っていた。人形薯は大変おいしい細長い薩摩いもであった。

〇次に七月といえば「お盆」がある。然し長崎市内の「お盆」は昭和二十七年より八月十三日より十五日となり、十六日はウラ盆と言つて初盆の家の人達だけが、お墓に送り燈籠をあげに行かれた。

〇盆の語源は前回にも記したように、古代インドの佛敎語 uḥambana を語源とし其の言葉の意味は「さかさまに吊される」とある。そこでこの苦しみを救うために三宝を供養し、更に祖先の霊を供養する事になっている。我が国で此の盆会が最初に行われたのは、飛鳥時代の斉明天皇三年(六五七)であるとされ、以来、奈良時代になると諸寺にて七月十五日盆会おこなうとある。

〇「精霊ながしは何時頃より始まつたのですか」と言う。一般に精霊流しが始まつたのは、室町時代・京都の浄土系の寺院行事に始まるとされ、長崎の町に精霊流しが始まつたのは伝承として盧岬にはじまると記してある。岬拙は、延宝三年(二六七五)生。享保十四年(二七二九)に歿し、長崎聖堂学頭であり天文学にも優れ、祖先は慶長十七年(一六二二)に福建省延平県より来航、その婦人は島原口之津の人・福地氏の娘とあり、二代盧庄左衛門は唐内通事に任命されている。盧氏の菩提寺は日蓮宗本蓮寺で「内中町住」と記してある。

〇長崎の精霊流しの事については昭和十三年刊長崎市史風俗編に詳しく記してあるので御読みたいだくとよい。

〇今月ご寄贈を受けた書籍

石橋裕子女史より、戦場から送られた九〇〇通の絵手紙が編集された『戦時下の絵手紙』二冊を戴いた。涙して読ませて戴く。(伊丹市柿衛文庫刊)

脇山壽子女史より、昭和二五年四月『長崎開港三百五十年長崎港祭り復活行事記念写真集』を中心に三冊の写真集を戴く。当時の知名士の仮装行列写真など楽しく見せて頂いた。

久保美洋子女史より『海港七七号』を戴く。歌集の中に

内閣の首相かわれば国政の

幾多制度も たびたび変る

何か教えられました。(コスモス短歌会長崎支部刊)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―一五四〇

十八銀行公会堂前出張所二F

